

氏名	かわしまともこ 川島朋子
学位の種類	博士(文学)
学位記番号	文博第244号
学位授与の日付	平成15年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	文学研究科文献文化学専攻
学位論文題目	能・狂言の成立と変遷 ——間狂言を中心として——

論文調査委員 (主査) 助教授 大谷雅夫 教授 木田章義 教授 日野龍夫

### 論文内容の要旨

#### 第一編第一章 狂言「薬水」の成立をめぐる

能<養老>の替間として演じられる「薬水」は、独立した本狂言としても演じられる。現在演じられていない大蔵流と鷺流の「薬水」の構成は、和泉流とはかなり異なるが、内容や台本の残存状況から見ても、こちらの方が先行していたと考えられる。さらに台本における扱いなどから見て、大蔵流の形の「薬水」は、本来独立した狂言であった可能性が大きい。その理由として、間狂言(アイ)の台本に見られる「薬水」は、本狂言として記載される「薬水」に比べ、滑稽性が薄れ、祝言を強調したものとなっているのである。また一方で、和泉流の「薬水」は、その狂言風流に近い形式からも、初めからアイとして成立したと考えられる。

大蔵流「薬水」には能<養老>のモドキとしての性格が認められる。本来は現在のような二場型の能ではなく、中入りアイを持たなかったと考えられる<養老>が、定型に従って複式能化される際に、「薬水」をアイとして用いたものであろう。大蔵流で「薬水」が本狂言としてのみでなく、脇能<養老>のアイとして演じられるうちに、その祝言性を増し、「薬水」が本来持っていたモドキ性や滑稽性が薄れ、やがて演じられなくなったのではないかと考えられる。また、賑やかな劇アイが敬遠されるようになり、アイとしても演じられなくなったと思われる。もともと脇能のアイとして成立した和泉流の「薬水」は、今日まで演じられていることから、そうした経緯を想像することができるのである。

#### 第一編第二章 <橋弁慶>の替間「弦師」とその周辺

能<橋弁慶>の替間「弦師」は現在和泉流でのみ演じられるが、かつて大蔵流でも演じていた。現在、大蔵流で演じられる<橋弁慶>のアイは、「弦師」と同じ構成を持つが、オモアイが弦師ではないのである。このオモアイの役柄の変化は江戸時代初期に起こったと考えられるが、その理由は何か。

実際に弦師と呼ばれた人々の活動に注目してみると、彼らは室町時代に弦を売り歩いてきたのだが、江戸時代にはそうした行商活動を行わなくなっているのである。おそらく、そうした彼らの実際の活動の変化が、アイにも影響を及ぼしたのではないかと考えられる。そもそも弦師を<橋弁慶>のアイに用いる理由を考えると、弦師が<橋弁慶>の前場の舞台となる五条付近に住んでいたことなどが考えられる。またその構成なども含め、<橋弁慶>の前場のモドキとしての要素も持ち合わせており、「弦師」が本来のアイである可能性は大きい。

独立性のあるアイの中でも、この「弦師」は<夜討曾我>のアイ「大藤内」と共に、特殊な性格を持つ。独立性が強いながらも、ストーリー性は薄く、あくまでも、時間的・空間的隔たりのある前場と後場をつなぐアイとして成立したものである。

しかし、「弦師」のストーリーの中で、弦師という職掌は必然性を持たない。大蔵流では、時代背景によって分かりにくくなった人物設定を変えることによって普遍性を持たせ、「弦師」ではないアイを演じるようになったのであろう。

#### 第二編第一章 <七騎落>のアイの変遷—作り物とワキの詞章をめぐる—

能<七騎落>の演出資料に注目してみると、そのアイの役割の変化がいくつか浮かんでくる。特に江戸初期の『観世流仕舞付』には古い演出が見られ、注目される。

まず一つには、現在は出されていない、大舟の作り物が最初に出されていたということが挙げられる。後場の冒頭に出る小舟は現在まで継承されているが、大舟に関しては、古い演出資料にしか記されていない。舞台演出上の効果や演技上の都合により、これが次第に省略されるに至ったことは想像に難くないが、大舟に関わっていたアイの役割もまた、変化するのである。『観世流仕舞付』によれば、この大舟の作り物を舞台上に出すのは、アイの役目であった。現在、このような作り物の運搬を行うのは、主にシテ方の後見である。しかしながら、この後見制度が成立する以前には、こうした舞台上の雑用は狂言方の役目だったのである。さらに、いくつかの資料により、<七騎落>に狂言口開があるとするものがある。その詞章を見ると、後でシテに大舟の用意を命じられ、既に用意するよう申し付けてある、と答えるアイが、舟の用意に触れるという内容になっており、整合性を持つものである。しかしながら、その資料の少なさや、口開の内容としては特異であることなどからも、舟の運搬を任されていた狂言方によって作り出された演出である可能性も考えられよう。

もう一つは、後場の冒頭でワキとアイが小舟に乗って登場する場面である。現在はワキの〔一セイ〕、アイの〔二の句〕の後、すぐにシテとの対応に移る。しかし、この〔一セイ〕・〔二の句〕に続き、ワキとアイの間に問答があったことが、『観世流仕舞付』ほか、問狂言資料などからも知られるのである。アイの〔二の句〕は滑稽な内容を含むものであるが、ワキがそれに対して答え、アイがさらに答えるといった、滑稽な問答が行われていたのである。

この二点について、<俊寛>との関係の可能性も考えることができる。現在よりも活躍の場が多かったアイの姿と、流動的であったアイの変遷の一端を読みとることができるのである。

## 第二編第二章 京都大学文学部蔵『大蔵流惣問語』の性格―「那須」の本文訂正を中心として―

京都大学文学部国語学国文学研究室蔵『大蔵流惣問語』（『惣問語』）は、貴重な問狂言台本として注目される。前半と後半は異なる性格を持ち、前半部は龍谷大学蔵『大蔵流問之本』と共通祖本を持つことが明らかであるが、後半部は異なった台本によると思われる、その性格は明らかではない。

この後半部の中に見られる、<八島>の替問「那須」の本文には、朱筆による大幅な訂正が加えられていることが注目される。その本文を見ると、訂正前の本文は江戸初期から中期の台本と、訂正後の本文は江戸後期以降の台本と、ほぼ一致する。大蔵流の「那須」の変化の過程を考えれば、この台本が筆記された時期の特定にもつながる。

前半部で『問之本』にはあるが『惣問語』には記されていない曲は、上演記録の見えない稀曲がほとんどである。そういった曲の上演状況や、後半部は前半部にはない曲を補うような形で書写されているようなことから、この台本が実演に用いられたものであること、その原本は江戸中期に遡るであろうことが推定できる。

## 第三編第一章 狂言「歌仙」考―その着想と特殊性をめぐって―

狂言「歌仙」は三十六歌仙のうちの六人が登場すること、在原業平、小野小町など、狂言には珍しく、歴史上の人物が登場し、その装束も能装束を用い、華やかであることなどから、その特殊性が指摘されてきた。

この曲の中心となっているのは、小野小町の歌であるが、古今注に見られる清濁の問題がその争いの材料となっている。歌をめぐる争いをモチーフとする狂言はいくつかあるが、その中でも特殊な性格を持つと言えよう。

現在も演じられる和泉流では、歌仙が絵馬から抜け出るという趣向を持つが、鷺流では宮中の歌合の場という設定であった。この「歌仙」は、装束や登場人物の選定や並び方など、三十六歌仙絵をモチーフに構成されたと考えられる。和泉流の趣向は歌舞伎舞踊の「額抜け」の趣向とも似ている。そうすると、鷺流の歌合という設定の方が自然であり、和泉流に先行していたと考えられるであろう。

さらに、現在は伝わらない大蔵流の台本にも「歌仙」が見られ、キリの謡のみ記す最古本『虎明本』、和泉流や鷺流の影響下にあると考えられる諸台本の性格など、課題も残るが、和歌に対する知識や関心を反映した作品であると言える。

## 第三編第二章 能<馬融>の成立

番外曲<馬融>は極端に短い詞章を持つ祝言能である。その形式は古体を残し、古作の能であると考えられてきた。

ところがその詞章は<難波>などの他曲を踏まえたところが多く、構想も<天鼓>を踏まえていると考えられる。するとこの能の成立時期は、世阿弥よりは後の時代ということになる。この曲において強調されるのは「祝言」であり、半能形式

で祝言に用いたり、新作を作ったりすることもあったことを考えれば、比較的新しい作としても不自然ではない。

古作とされる理由の一つに、三番叟の囃子が用いられているという点がある。しかし、他の能で三番叟の囃子が用いられる例は見られず、極めて特殊である。この能の中で重要な要素は、「管絃講」を行うという設定であると思われる。音楽的な面に重点を置き、また祝言を目的とするために、三番叟の囃子を用いたと考えることができよう。

馬融という人物は、笛の伝書の中で、笛の創始者として語られてきている。楽書から受け継がれ、能楽の笛方の伝書にも多く見られる。そのような、音楽面で著名な人物であったために、このような音楽的に重点を置いた作品の題材とされたのであろう。

## 論文審査の結果の要旨

能と狂言とは、それらが同じ舞台上で演じられることに明らかなように、猿楽という芸能から派生した同根の芸能であり、互いに深い繋がりをもつものである。その密接な関係は、多くの場合、二場物の能で前ジテの退場のあと後ジテが登場するまでの間に、狂言方の役者が登場して問わず語りをしたり、能のワキと問答したり、何らかの演技をしたりして、間をつなぐとともに能の梗概を示し、また筋の展開を助けること、すなわち一曲の能の中に狂言方が演じる間狂言（以下、アイ）があることにも明らかに見て取ることができる。

従来、能と狂言とは、それぞれの専門家によって、別々に研究されることが多く、両者を繋ぐアイの研究は比較的少なく、研究されても、アイそのものの作品論に終始する場合が多かった。本論文は、そのアイの形態や演出を分析してその意味を明らかにするとともに、それにより、能と狂言とが互いにどのような関係をもちつつ生成し、発展してきたかを考えようとする意欲的な試みである。

アイの中にははっきりとした筋立をもつものがあり、その中には単独の狂言（本狂言）として演じられる作品がある。本論文の第一編は、こうした劇形式を持つアイを扱っている。従来、この種のアイは、能の成立当時からの本来のアイであることが多く、本狂言として演じられる場合は、本来のアイが能から独立して演じられたものと捉えることが一般的であった。しかし、第一章「薬水」は、能「養老」のアイ「薬水」を取り上げて、「養老」は本来は一場物の能であってアイを必要としなかったこと、そして本狂言「薬水」が狂言らしい滑稽味をもつものに対してアイの「薬水」は祝言的な表現に傾くことなどを明らかにして、通説的な見方とは反対に、本来アイを持たなかった能「養老」が二場物の能として定型化するに伴って、本来は能のモドキとして成立していた本狂言「薬水」をアイとして用いたのではないかと説いた。狂言諸派の台本を比較分析する緻密な考証に基づいた十分に説得力をもつ仮説と評価できるであろう。また第二章では、能「橋弁慶」の替アイ（普段とは異なる特殊な演出のアイ）と見なされている「弦師」が、むしろ本来のアイであったことを論証した。このアイの登場人物、五条の橋の上で人に切られそうになったと助けを求めてくる弦師は、室町時代に祇園社に属して五条周辺に住んだ弓の弦売り「つるめそ」を写す人物であったこと、江戸時代になって、その「つるめそ」が姿を消し、忘れられたことが、アイの「弦師」が狂言流派によってはまったく演じられなくなり、または他の演出に変わってしまった一因であると論じたのである。これも諸流の台本と演出とを精査し比較した上の鋭い分析と評価できる。

このように、アイは、能狂言の史的展開を知るための重要な鍵となるものであるが、従来その研究が必ずしも進まなかったのは、アイの演出が時代によって流動的であって台本に乏しく、わずかに残る台本もまた十分に整理されていなかったことにその一因があった。第二編第二章は、アイの台本の一つ、京都大学文学部蔵『大蔵流惣問語』を精査し、その性格を明らかにするものである。基本的資料の徹底的な調査が、本論文全体の信頼性を高めていると言えよう。

第一編の二つの論文に示されたように、アイへの着眼は、能と狂言それぞれの成立についての新しい見方をもたらすものであった。第三編はアイを直接に取り扱うことはないが、その第一章は狂言「歌仙」、第二章は能「馬融」のそれぞれの趣向の成立を的確に論証するものであり、間狂言の研究によって培われた分析力を十分に揮うものと評価できるであろう。

もちろん、本論文に扱われているのは、数多い能・狂言作品のほんの一端であり、それぞれの論考は個々の作品の問題に留まっている。能・狂言の生成と変遷の過程全体を明らかにすることは、まだまだ遠い目標と言わなければならない。しかし、その全体の理解は、言うまでもなく、個別の考察を積み重ねることによってこそ可能となろう。論者が今後たゆまずに努力し、業績を重ねてゆくことを期待する。

以上，審査したところにより，本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。平成15年2月20日，調査委員三名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果，合格と認めた。